

「新しい定時制高校創設プロジェクト」第2回有識者会議 会議概要

- 1 日 時 平成27年2月23日 月曜日  
開会 10時00分 閉会 11時30分
- 2 場 所 京都市総合教育センター 第2研修室
- 3 会議メンバー (有識者) 竹田契一氏, 宇都宮誠氏, 伊藤一雄氏, 水野篤夫氏, 村岡徹氏  
(冒頭挨拶) 清水教育委員会指導部担当部長  
(プロジェクト委員) 西田委員, 村上委員, 田中委員, 鳥羽委員, 辻浦委員, 山本委員, 中塚委員, 東原委員, 畑委員, 酒崎委員, 谷口委員
- 4 傍聴者 9人
- 5 会議の概要
  - (1) 冒頭挨拶 (教育委員会 清水指導部担当部長)
  - (2) 有識者紹介 (教育委員会)
  - (3) 「新しい定時制高校創設プロジェクト」まとめ(案)に関する事務局説明・協議  
ア 説明 (教育委員会)  
配布資料「「新しい定時制高校創設プロジェクト」まとめ(案) (平成27年2月現在)」 「市立夜間定時制高校の概要」により説明  
イ 主な意見 (○は有識者, ●はプロジェクト委員)
    - 基本的には学習指導要領に沿ってカリキュラム編成をしていくべきだが, 小中学校で国語・数学などの普通教科につまずいてきた生徒の学習意欲を高めるためには, 高校は中学校と異なる勉強を実感させることも大事である。その意味で, 職業系の科目も取り入れることも有効であると考えます。  
また, 普通科よりも職業学科を卒業した生徒のほうが, 正社員の離職率は低く, 職業教育を通じて, 社会人として生きる力が身に付くことも多いと感じている。  
これらも踏まえ, 学力差もある多様な生徒が入学する中で, 学び直しなど柔軟なカリキュラムにしてほしい。
    - 学校だけで全て抱えるのではなく, 外部の様々な機関と連携しながら, 取り組んでいくべきである。学校以外の実践に学ぶことは, 教員のスキルアップにも繋がると考えている。  
これまで, 色んな場面でつまづいてきた若者の支援を行ってきたが, 圧倒的に社会

経験が少ない子が多い。アルバイトが社会経験に繋がらないケースも多いと聞くので、学校生活の中で、外との繋がりを持つ機会を増やすようにしてほしい。

- 「まとめ(案)」にも示しているとおり、職業教育の重要性は十分に認識しており、外部の力も積極的に活用しながら、キャリア教育も充実していきたい。
- 伏見工業では、卒業後の就労に繋がるアルバイトを紹介できるよう企業開拓に努めているところである。企業も中学校卒業者の雇用は難しいが、アルバイトなら受け入れてもらえる所も一定ある。
- 最近では、発達障害などの精神障害においても手帳が取得できる場合も増えてきており、企業も障害者の法定雇用率を上げる観点からも、そのような生徒は就職しやすくなってきている。  
しかし、法定雇用の場合は、賃金の上昇率が低いことが多いなど、デメリットも否めない。
- 西京の進路結果について、4～6割の就職・進学している生徒たちの以外の進路はどうかか。
- 進学のための資金を貯める、自立して社会生活を送るなどの目標に向け、アルバイトを継続している生徒が多い。
- 今春開校の府立清明高校（定員120名）は、施設設備が新しいこともあり、人気が出てきているが、「学び直し」など本来の学校が求めているコンセプトを生徒がどれだけ理解して受検しているのか、中学校現場からは疑問の声が上がっている。新校では、現在の入試では学ぶ意欲など数値では計れない部分が多いことも十分考慮し、学び直したい意欲を持っている生徒に対して、進路選択ができるような制度を検討してもらいたい。  
また、教育内容や学校規模についても、しっかり中学校現場への早期の情報提供に努めてほしい。
- 入試制度の検討については、府との協議が必要だが、今後とも中学校現場との情報交換も積極的に行いながら、教育相談や体験入学を通じたマッチングのあり方など、一度だけの入試によるミスマッチを防ぐような仕組みを検討していきたいと考えている。
- 本市の総合支援学校の職業学科においても、入学前に7、8回のオープンスクールを実施し、その中で保護者・生徒と面談を繰り返しながら、就学に繋げており、そのような取組も参考にしていきたい。
- 京都市は洛風・洛友中学校、総合支援学校などこれまでから先進的に取り組んでおり、今回の定時制単独校も発達障害のある生徒たちにスポットを当てたことは、大変画期的なことである。診断が出ていなくても、様々な困りを抱えた子どもはたく

さんいる。そのような生徒に対して、一人一人のつまづきの要因や発達のかたよりを把握して、それぞれの生徒に応じた支援を行いながら、「基礎学力の向上」「ソーシャルスキル（社会性）」「コミュニケーション力」をしっかりと身に付け、自立して社会に送り出せる学校として、全国に先駆け、どんどん新しい研究にチャレンジしてほしい。例えば、小学校段階の学力しかない子に高校水準の授業をしても到底理解できない。こうした辺りにも柔軟な対応が出来る様にしてもらいたい。

そのためにも、発達障害などの知識・理解のある教員の配置は不可欠である。

- 現在、伏見工業では、国の研究指定を受け、特別支援教育の専門教員を今年度より配置しており、「個別の指導計画」をはじめ、様々なアドバイスをいただきながら取組の充実を図っている。今後、西京にもそれらの取組を広げていきたいと考えている。

- 生野学園（全寮制の不登校支援の中学・高校）が開校して26年間、様々な不登校の生徒と付き合ってきたが、色んな悩みを抱える両親や子どもたちの思いに応えようと、また、ひきこもり気味の生徒が少しでも立ち直ることができるよう努めてきた。また、本校では入学前には心理テストや、両親の面談も丁寧に行ってきた。

その中で、学校の一番大切な役割は、一人で家にいた子どもが、6年間の寮生活の中で、友達やクラスメイトと様々なことを共有し、他者と自分の違いに気づきながら、自分の存在を認めてもらえ、確認できる場にしていくことであると確信している。

新校では、これらの役割を果たすことができるような要素を多く取り入れて、将来、自立していける生徒を育てることができる学校づくりを行ってほしい。

(6) 閉会挨拶（教育委員会 畑学校指導課担当課長）